寺西頌一
古稀記念独唱會

昭和45年8月9日(日)午后2時30分

於

西宮市松原町2—37　西宮市立勤労会館ホール

曲　　目

I

開会のことば　　中沢いと子(参議院議員)

(1) 男声合唱　　セレスティーナ男声合唱団

〝独逸ミサ〟より	シューベルト
なやみの時に	
聖なる哉	
祈り	

(2) 独唱(伊太利歌曲)　　ピアノ伴奏　上田時子

遥かなるサンタ・ルチア	マリオ
カロ・ミオ・ベン	ジョルダーニ
カタリ・カタリ	カルディルロ
理想のひと	トステイ
マンマ	ビキシーオ

(3) 重唱　　上田直紀　上田文人　上田恵

おとなマーチ	大中恩
仲良し円舞曲	高田信一
花のまわりで	大津三郎(山本直純編曲)

(4) 独唱(日本歌曲)　　ピアノ伴奏　奥沢喜久子

砂丘の上	小松耕輔
落葉松	長村金二
椰子の実	大中寅二
からたちの花	山田耕筰

(休　　憩)

Ⅱ

(5) 独　　唱（独逸歌曲）　　ピアノ伴奏　奥沢喜久子

自然に於ける神の栄光	ベートーフェン
海辺にて	シューベルト
汝れこそ我が憩ひ	〃
蓮の花	シューマン
ロマンツェ	〃

(6) 重　　唱　　上田直紀　上田文人　上田恵

ピクニック	イギリス民謡（小林秀雄編曲）
おゝブレネリ	スイス民謡（矢代秋雄編曲）
愉快に歩けば	メラー（小林秀雄編曲）

(7) 男声合唱　　セレスティーナ男声合唱団

野ばら	ヴェルネル
別れ	シュワーベン民謡
ウントロイエ	グリュツク

(8) ミュージカル・ソオ（洋鋸）独奏　　粕谷二郎

ピアノ伴奏　粕谷咲子夫人

サンタ・ルチア	パラルディ
浜辺の歌	成田為三

(9) 独　　唱（歌劇アリア）　　ピアノ伴奏　上田時子

星は光りぬ（トスカ）	プッチーニ
夢の如く（マルタ）	フロトウ

賛助出演者御紹介

セレスティーナ男声合唱団

大正11年（1922年）創立、去る5月を以て創立満48年、宝塚音楽協会主催第1回合唱コンクール（昭和2年秋）第3回コンクール（昭和3年秋、ヨセフ・ラスカ氏指揮）に優勝。
J.O.B.K の大阪三越屋上仮放送時代より昭和17年迄毎年数回ラヂオ放送す。
昭和12年神戸海員会館ホールに於て　エクゲン・クレイン氏指揮、ヴァイオリニスト辻久子嬢の賛助出演の下に創立15周年演奏会を、昭和27年4月神戸商工会議所ホールに於てアルバート・フォーロー教授指揮にて創立30周年演奏会を催す。
近年は主として基督教会の聖日礼拝、其他に聖歌合唱による奉仕をして居る。

粕谷二郎氏

関西教育映画株式会社々長、関学高商卒、在学中柔道、水泳の選手として、又グリークラブ、マンドリン・クラブ員として多方面に活躍、近年はミュージカル・ソウ（洋鋸）の演奏を研究し、各テレビ放送に出演せらる。本日の演奏に用いられる鋸は先年欧州漫遊の際西独逸にて手に入れられた逸品である。

粕谷咲子夫人

東京音楽学校（現東京芸大）卒のピアニスト、井口基成氏と同期

奥沢喜久子嬢

大阪市大社会福祉学科卒、現在商船航空会社勤務。ピアノは幼少より神沢哲郎氏に師事、目下島岡夫三雄師につき声楽勉強中

上田時子

寺西頌一の長女、神戸女学院大学音楽学部声楽科卒、在学中より古沢淑子女史に師事す。

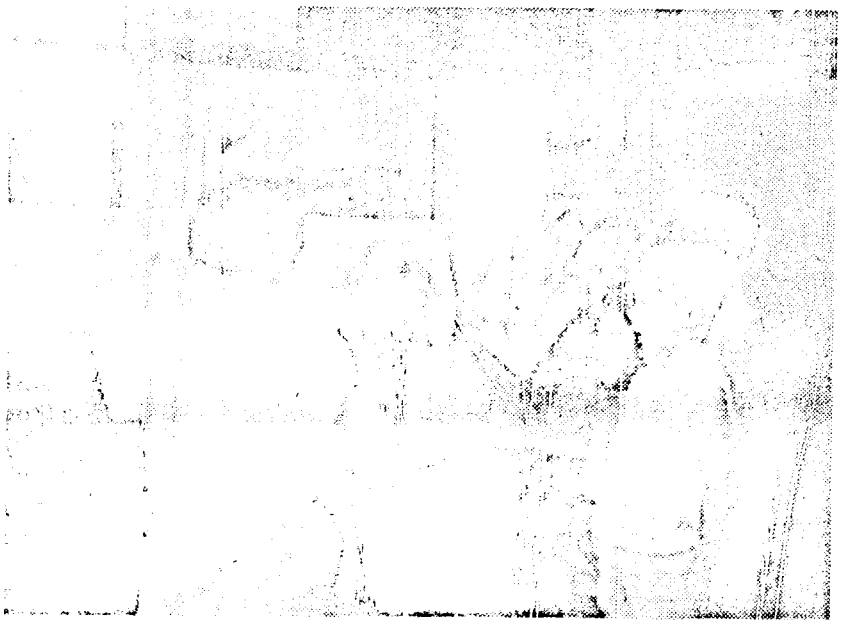
上田直紀・文人・恵

上田時子の子、寺西頌一の外孫、西宮市立上ケ原小学校5・3・1年生

神戸新聞　昭和45年8月8日　土曜日

70歳の祝いにリサイタル

万年青年のアマ声楽家・寺西さん　西宮



七十歳を迎えた古希の祝いに記念独唱リサイタルを開こうというアマチュア声楽家がいる。万年青年そのままに、元気はつらつとノドの仕上げに余念がない。晴れの舞台では、娘さんのピアノ伴奏や孫さんとの合唱もプログラムにある。親子三代のなごやかな音楽会になりそうだ。（写真は娘さんの伴奏で、お孫さんと合唱の練習をする寺西さん＝西宮市仁川町五の自宅で）

娘がピアノ，孫も合唱

あすの舞台に猛練習

この人は九日に西宮市立勤労会館ホールで、古希記念独唱会を開く同市仁川町五ノ七六、保険会社代理店経営の寺西頴一さん（七〇）。西宮市、ドイツ語ペイ語学校長。年齢の数倍もあるかのようなレッスンにはげむ寺西さん。今月末

俗や案内状の整理に忙しい毎日を過ごしている。

寺西さんは、西宮市のアマチュア声楽家で結成しているセレスティーナ男声合唱団の主宰者。「趣味でやっているもので我流だから人に聞かせるしろものじゃありません」とけんそんするが、グループは大正十一年の結成で、四十八年も続いている長寿グループ。団員も大半が六、七代という。もちろん、リサイタルには全員で応援出演する。「ハーモニーの楽び。これが音楽から得た一番の収穫です」と寺西さんは語る。

寺西さんの音楽歴は古い。大阪の旧制北野中学校時代までさかのぼる。二年先輩に作曲家大中寅二さんがいた。この人の影響を受けたという。当時、北野中学にはYMCAがあり、週一回近くの教会から牧師が来て集会を開いていた。集会でとに音楽を歌う。これが音楽との付き合いの始まりだった。「ラジオもない時代ですからねえ、私らの年代では、西洋音楽に触れる機会はそう多くなかった」と寺西さんは回想する。体の弱かった寺西さんには、大きな励ましになったのも健康法の一つだった。大正末年、中学卒業。保険会社へ就職してからも音楽へはこの間、やがて楽仲間と合唱団を作り、音楽に熱入られていった。

「自分の思うままにならない分を娘に託した」という寺西さんは一人娘の時子さん（さん）に三歳の時から声楽、ピアノを本格的に習わせた。その時子さんが、今度リサイタルでピアノの伴奏者として舞台に立ってくれる。おまけに孫の直紀君（二）文人君（一）の三人も合唱で参加する。「家族ぐるみでやれるのが何よりうれしい」と寺西さんの心はもう舞台の上に飛んでいる。

「リサイタルなんて、そう何度もできるものじゃない。七十になった祝いの意味で知人や親せきといっしょに楽しみたいと思った」と勧誘を語る。知人、親せきに五百枚の案内状を配ったが、中学の同窓生である元県知事阪本勝さんから激励状が舞い込み、寺西さんを喜ばせた。「七十七歳の喜寿が金婚式にもなるんです。元気だったら、その時もぜひやりたい」と音楽への情熱はつきない。間近に迫ったリサイタル。寺西さんは、ひまを見つけてはお孫さんとぶっつけ練習を重ねている。

昭和45年（1970年）8月10日　月曜日　朝日新聞

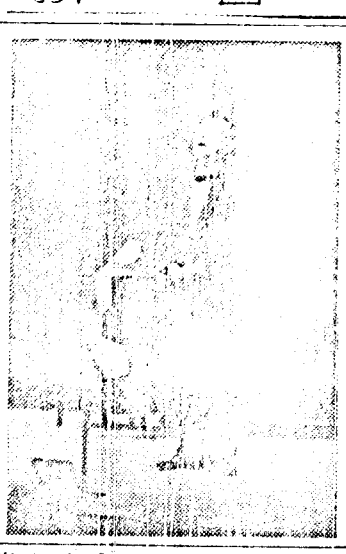
西宮の寺西さん

古希祝い独唱会

心意気に友人ら拍手

七十歳の老人が九日、西宮市立勤労会館ホールで、古希を記念して独唱会を開いた。酒宴に招待するよりも、リサイタルで自分の好きな歌を歌い、はつらつとしたところを披露、集った人たちから祝ってもらおうというわけ。会場では、知人、友人など約三百人がこの心意気に盛んな拍手を送った。

西宮市仁川町五丁目、保険代理業寺西頴一さんで、大阪の北野中学時代、クラブ活動でYMCAにはいり、教会で賛美歌を歌っているうち、歌う楽しさにとりつかれた。卒業後、保険会社に就職、神戸支店に配属されるとすぐ、神戸



娘さんの伴奏で歌いまくるにぎやかな寺西さん（西宮市立勤労会館で）

昭和45年（1970年）8月10日　月曜日
朝日新聞

西宮

古希祝い独唱会

心意気に友人ら拍手

西宮の寺西さん

七十歳の老人が九日、西宮市立勤労会館ホールで、古希を記念して独唱会を開いた。酒席に招待するよりも、リサイタルで自分の好きな歌を歌い、はつらつとしたところを披露、集った人たちから祝ってもらおうという。会場では、知人、友人など約三百人がこの心意気に熱んな拍手を送った。

西宮市仁川町五丁目、保険代理業寺西娘一さんで、大阪の北野中学時代、クラブ活動でYMCAにはいり、教会で賛美歌を歌っているうち、歌う楽しさにとりつかれた。卒業後、保険会社に就職、神戸支店に配属されるとすぐ、神戸市内や阪神間の"歌気違い"とともに合唱団の草分け「セレスティーナ男声合唱団」を結成した。寺西さんは定年後暇ができたので、再び発声練習から勉強を始めた。

「生来、ひ弱なたちだったが、年をとるにつれ健康になっている。これも歌のおかげ」と寺西さん。こんどのリサイタルについて家族らは「余り騒れがましいことはしないで…」と猛反対だった。だが、寺西さんは「年をとって長うたを始める人もいる。西洋の歌だからいけないということはないはず。それに飲んで食うだけの宴会よりはましや」と説得、神戸女学院大学音楽部を出た一人娘の上田時子さん（三）がピアノ伴奏、時子さんの長男同市立七ケ原小学校五年直紀君（二）次男、同校三年文人君（九）と次女、同校一年恵ちゃん（五）や、いまも活動を続けているセレスティーナのメンバーが特別出演してくれて、この日のリサイタルとなった。

寺西さんは「カロ・ミオ・ベン」「マンマ」「椰子の実」「からたちの花」など十六曲を独唱した。調子をとるように、タキシード姿をゆっくりと動かし、自分の歌に酔った様子。続けざまに歌ったため、とぎれ目切れしていたようだが、会場に拍手が絶えなかった。

孫や親類のこどもたちからの花束に埋もれた寺西さんは、青春のようにほおを紅潮させ「私の歌はこれからだ。喜寿（七十七歳）までもリサイタルを開きます」―。

孫さんの伴奏でかいしれたおじいさん寺西さん（西宮市立勤労会館で）

に託した」という寺西さんは一人娘の時子さん（三）に三歳の時から声楽、ピアノを本格的に習わせた。その時子さんが、今度リサイタルでピアノの伴奏者として舞台に立ってくれる。おまけに孫の直紀君（二）文人君（九）恵ちゃん（五）の三人も合唱で参加する。「家族ぐるみでやれるのが何よりうれしい」と寺西さんの心ははや舞台の上に躍んでいる。

「リサイタルなんて、そう何度もできるものじゃない。仕事を持った祝いの意味で知人や親せきといっしょに楽しみたいと思った」と動機を話す。知人、親せきに百枚の案内状を配ったが、中学の同窓生である元県知事阪本勝さんから激励状が舞い込み、寺西さんを喜ばせた。「七十七歳の喜寿が金婚式にもなるんです。元気だったら、その時もぜひやりたい」と音楽への情熱はつきない。間近に迫ったリサイタル。寺西さんは、ひまを見つけてはお孫さんたちと練習を重ねている。

暑さの折柄益々御健祥の御事と御喜び申上げます
扨而私事去る三月十一日を以て満七十才に相成りました
平均寿命の延びて参りました今日　今更ら古稀でもある
まいと思召すことで御座いましようが　生来所謂蒲柳の
質の私と致しましては　七十才迄も生きやうなど考えて
も見なかった丈けに嬉しさも一しおでございます
そこで予て念願し乍ら実現できませんでしたリサイタル
を古稀の記念として　セレスティーナ男声合唱団の諸兄
粕谷氏御夫妻　奥沢嬢並に私の娘　孫達の協力を得まして
左記の通り催すこと、致しました
酷暑の砌　其の上に文字通り下手の横好きの素人芸で御
耳を汚しますこと洵に恐縮に存じますが七十にして尚衰
えざる私の音楽に対する情熱に免じて　御誘合せ御来聴
下さいます様御案内申上げます

記

日　時　昭和四十五年八月九日（日）
　　午后二時三十分より
会　場　西宮市松原町二番三七号
　　西宮市立勤労会館一階ホール（冷房完備）
　　電話西宮三四―一六六二番（代表）
　　（阪神電車西宮東口駅より東北へ徒歩約一分
　　国鉄西宮駅より南西へ徒歩約七分）

昭和四十五年七月吉日

西宮市仁川町五丁目三番七二号

寺西頌一